

猿投窯型瓦塔の展開（1）

—信濃の猿投窯型瓦塔—

● 永井邦仁

愛知県内の8世紀後半～9世紀初頭の須恵器窯跡から出土した、瓦塔の形態的・技法の特徴をもとに「猿投窯型瓦塔」を設定した。そして同型の瓦塔は尾張・伊勢・三河・遠江に加え信濃中・南部地域にも分布することをあきらかにした。またこの時期は列島の各地で「地域型」瓦塔が展開しており、その分布する地域ごとに視点を据えていくことの重要性を強調した。

なぜ瓦塔なのか

愛知県内に所在する猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）では、8世紀後半から9世紀初頭に多数の瓦塔が須恵器とともに生産された。このことは猿投窯研究の始めから知られていることではあるがあまり注目されていない。筆者が資料集成を始めてからも毎年のように猿投窯での出土例が確認され、増加傾向は止まるところを知らない。加えて愛知県内の寺院跡・集落遺跡で出土する瓦塔の数も相当数に上る。それらはいずれも須恵質焼成である。

ところで筆者がかつて知見した関東地域の瓦塔はこれとは異なっていた。どこで焼かれたのかもわからない土師質のものが大半を占め、さまざまな細部表現方法がみられ、年代も8世紀代から10世紀代まで幅があった。したがって瓦塔といえば奈良から平安時代の仏教関連の遺物、と一括りにされる傾向があった。ところが近年盛んになってきた村落内寺院や在地仏教信仰の研究では、集落内における仏教信仰を示す資料という重要な位置づけがなされ、いよいよ大掴みな年代観では扱いにくくなってきた。

このような研究状況のなかで池田敏宏は、瓦塔屋蓋部の分類に基づく関東地域の瓦塔編年の構築を続けている。それは、勝呂類型・多武峰類型（8世紀前葉～中葉）、萩ノ原類型・大仏類型・姥田類型（8世紀後葉～9世紀初頭）、宮ノ前類型・東山類型（8世紀末～9世紀前葉）、上西原類型（9世紀前葉～中葉）、柳原類型（9世紀中葉）、東郷台類型（9世紀中葉～末葉）と変

遷するという。そして数量的にみて関東地域における瓦塔の最盛期は8世紀末～9世紀中葉であるとまとめている（池田1999b）。とりわけ池田の指摘で最も重要なのは、約2mの高さがあった瓦塔が8世紀末～9世紀初頭の時期に一気に小型化するという点である。この大幅な「モデルチェンジ」を経て関東地域の瓦塔最盛期が到来するのである。

「モデルチェンジ」にこめられた需要地、あるいは瓦塔造立者の意図については多様な解釈がなされるであろう。しかし瓦塔生産という観点からは、瓦塔の作り手が限定的すなわち工人であるからこそ「モデルチェンジ」が可能なのだと思起される。関東地域では、瓦塔生産の遺構は須恵器窯跡も含めてそれほど多く確認されているわけではないが、類型化の先に見えてくるのはまずは瓦塔工人であると筆者は考える。加えて猿投窯での瓦塔生産の最盛期ないしはそれを過ぎた時期に関東地域での瓦塔の「モデルチェンジ」と最盛期が該当する点はひじょうに興味深い。

本稿では猿投窯における瓦塔工人を復元する作業の一環として猿投窯産瓦塔の類型化を目指し、その供給先や系譜関係にある周辺地産の瓦塔について論及したい。

8世紀後半の「地域型」瓦塔

猿投窯産瓦塔は、猿投窯須恵器編年の鳴海32号窯期～井ヶ谷78号窯期の須恵器窯跡で出土する。現在比定されている暦年代では8世紀後半～9世紀初頭である。古代の瓦塔は7世紀

実測図出典
 御祖神社裏窯・山方里窯跡 小田2007
 備中国分寺跡 亀田2002
 ハガ遺跡 草原2004
 佐々生窯跡 善端1994
 瀬後谷瓦窯跡 石井1992
 折戸80号窯跡 高崎1989
 東村山市No.2遺跡東京国立博物館2002

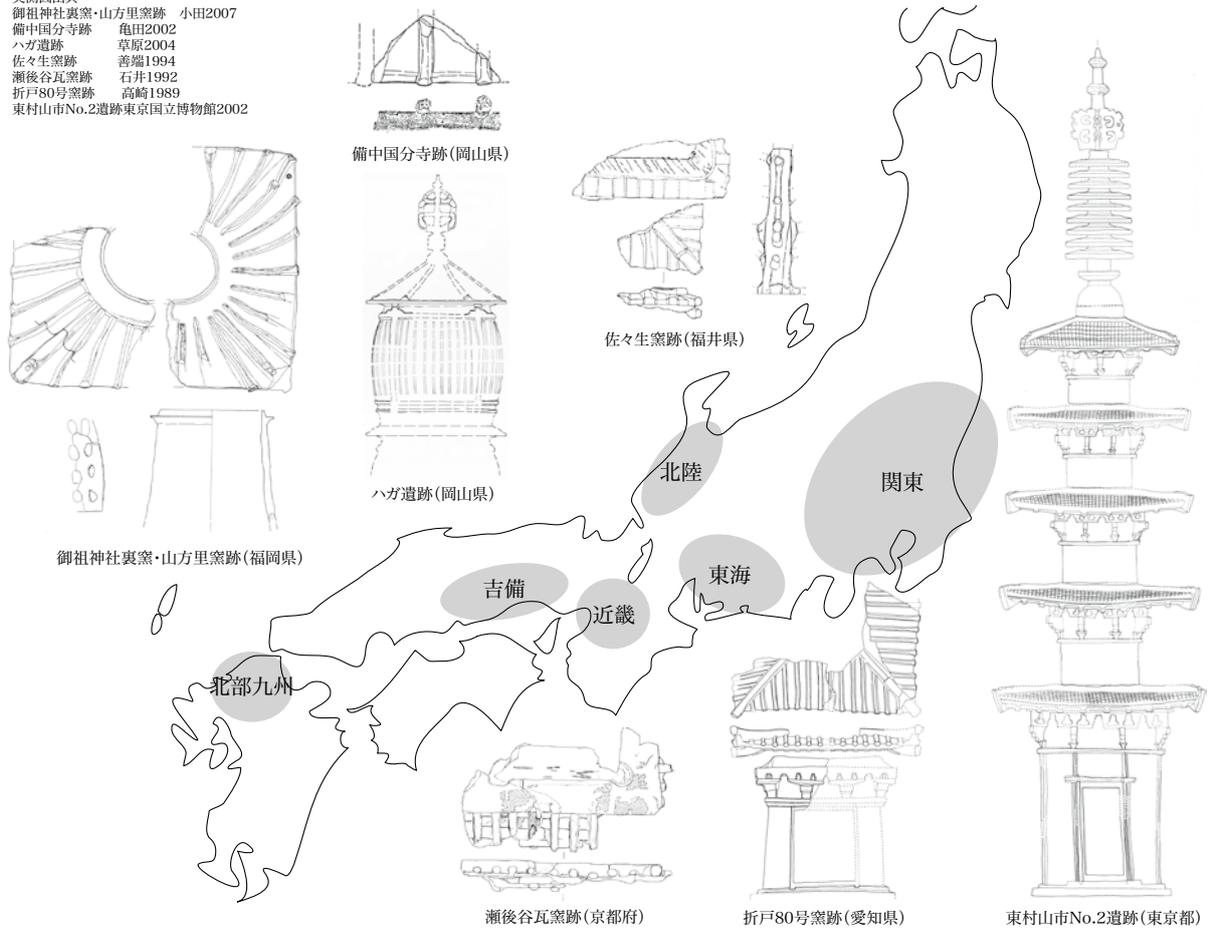


図1 8世紀後半の瓦塔

後半～8世紀初頭には出現し、8世紀前葉～中葉は少数認められるようであるが、いまだ不明な点が多い。その全体を復元できる資料がほとんどないことと、地表面へ造立されるため遺跡では包含層から出土する傾向があり、詳細な時期を特定しにくいのが原因である。なお本稿ではあまり瓦塔を限定的にとらえずに塔や堂といった仏教建築をもとに制作された須恵・土師質土製品の一つと考えているので、多層塔を中心に例えば仏堂をイメージした瓦堂も含める。

ここで8世紀後半の瓦塔を概観する(図1)。まず関東地域では多武峰類型の一部と萩ノ原類型と大仏類型が該当する。萩ノ原類型・大仏類型が約30遺跡で確認されているようである。北陸地域には、佐々生1号窯跡(福井県)や福山1号窯跡(富山県)で当該期の須恵器と共伴する瓦塔があるほかは8世紀末あるいは9世紀前葉以降のものが大半である。東海地域では猿

投窯出土の事例だけでも10遺跡あり、後述する同型の分布状況からこれを上回る数になることは確実である。近畿地域では瀬後谷瓦窯跡(京都府)などごく少数が認められる。吉備を含む中国地域では亀田修一による集成がなされている(亀田2002)。これによると年代の明確でないものが多いが、スリットの入る円筒形軸部や多角形塔といった特徴がみられる。これら特徴をもつ一群が備前・備中国域から播磨国域に展開する*。さらに西方の北部九州地域の瓦塔に関しては小田富士男による集成がある(小田・下原2007)。これによると豊前北部(福岡県)の須恵器窯群で8世紀後半の窯跡から8点の瓦塔が出土しているという。円筒形軸部と、丸瓦列が放射状に配置される屋蓋部で構成される多層

*播磨国域では千本屋廃寺跡(高井1982)などで円筒形軸部の瓦塔が出土する。同様の瓦塔は、兵庫県三田市金心寺廃寺跡(摂津国有馬郡)でも確認した。当該事例については続編で明らかにしたい。

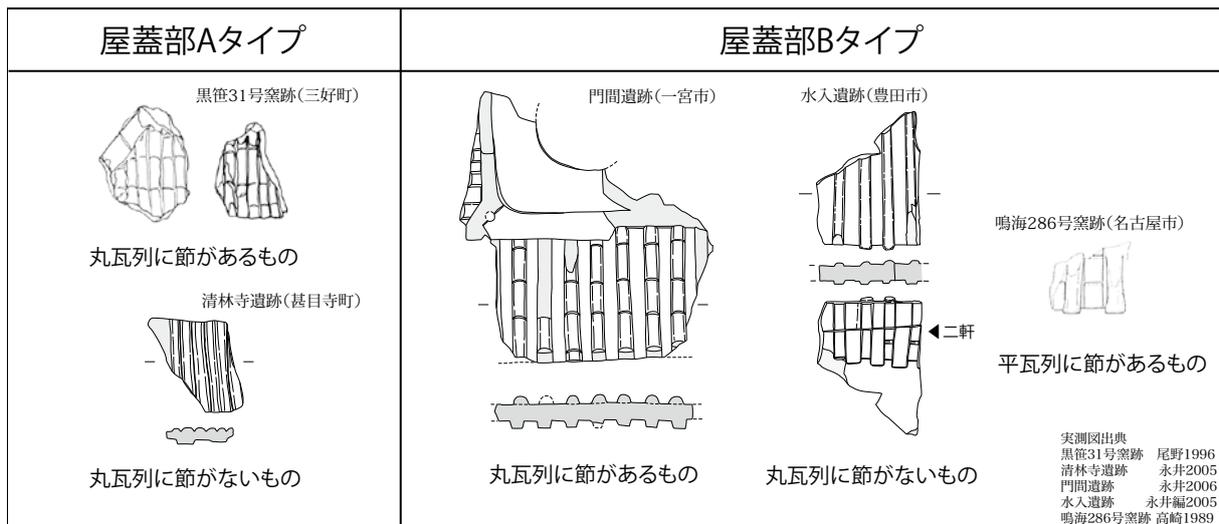
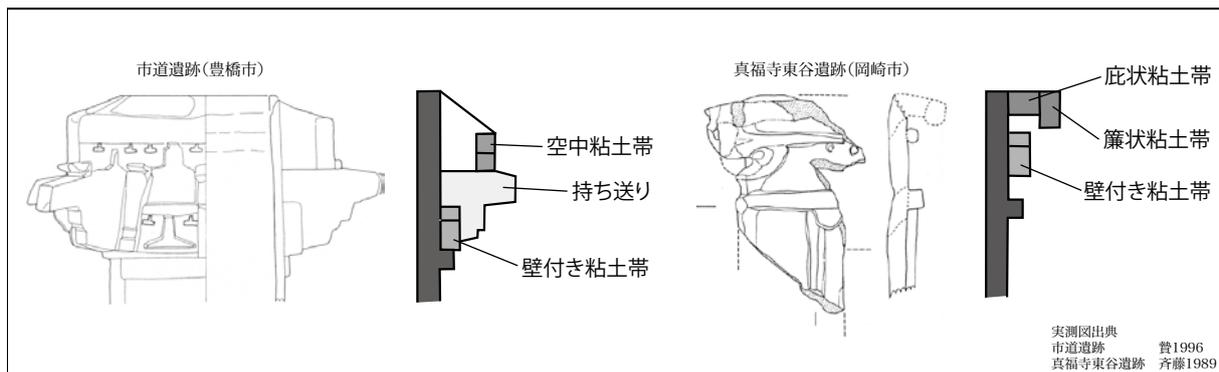


図2 粘土帯による組物表現の概念と屋蓋部分類

塔である。これはきわめて特徴的な一群で型式設定も可能であろう。これと同型の瓦塔がやや離れた太宰府近郊の牛頸窯跡で生産されていたことも判明しており、北部九州地域の数カ国に供給されたタイプであったといえよう*。

このように8世紀後半段階では、関東地域と東海地域の方形多層塔形の瓦塔が数量的に他地域をリードしており、9世紀代の関東甲信越・北陸地域に多数分布する瓦塔の基礎となる。しかしここで注意しておきたいのは、数カ国からなる地域ごとにそれぞれ特徴をもった瓦塔が存在した点である。つまり私たちが瓦塔として最もイメージしやすい方形多層塔形の瓦塔も、8世紀後半段階にあっては「地域型」瓦塔のひとつだったのである。ということは東海地域と関東地域の瓦塔もそれぞれ別の「地域型」という観点で検討することが必要なのではないだろうか。

* 北部九州ではこれ以外にも関東地域に系譜関係を想定すべき瓦塔が存在する(佐賀市上和泉遺跡出土瓦塔など)。関東地域からの移住によってもたらされた可能性が考えられるが、今後の検討課題である。

猿投窯型瓦塔について

ここでは猿投窯産瓦塔から形態や制作技法上の特徴を抽出し、猿投窯型瓦塔を設定する。

筆者は以前、猿投窯産瓦塔と美濃須衛窯産瓦塔を比較する過程で、前者が軸部の組物表現を特徴的な技法で制作している点を指摘した。そのなかで、持ち送りや尾垂木の突出を表現する点は東日本各地の瓦塔に認められるが、その上ないしは横に組物(斗栱)表現を付加した粘土帯をあたかも空中線のように架す技法は、猿投窯産瓦塔や尾張から三河・遠江地域の瓦塔を特徴づけるものであるとした(永井2005)。

本稿ではまず、粘土帯による組物表現技法について整理する(図2上)。ひとつは壁付き粘土帯で、軸部本体(壁面)に貼付けるものである。次に軸部上端から底のように張り出す粘土帯で、底状粘土帯とよぶ。これはほとんどが貼付けと思われるが一部折り曲げによるものもあろう。ただしこれに組物表現が施されることは

ない。組物表現を施すのは、庇状粘土帯から垂下させた粘土帯である。これを簾状粘土帯とよぶ。以上をまとめると、壁付き粘土帯・空中粘土帯・簾状粘土帯の3つに分類できる。

次に従来からの分類観点である屋蓋部の丸瓦列表現について整理しておく(図2下)。大別すると丸瓦列が連続し平瓦列表現がないAタイプと、独立した丸瓦列の間に平瓦列表現のあるBタイプがある*。そしてそれぞれが丸瓦一枚分を表現する節の入るものとそうでないものに分けられる。さらに平瓦列表現の中には平瓦一枚分を表現するものがある。

裏面の垂木表現をみると、初層屋蓋部以外ではいずれも地垂木と飛檐垂木からなる二軒構成である。この垂木間にも段差をつくるものとならないものがある。ちなみに前者について加えると飛檐垂木が軒先に達するものとそうでないものがある。実際の木造建築では飛簷垂木が軒先瓦よりも突出することはなく、そのあたりを意識した表現であろう。

屋蓋部ではほかに、上端部における裳階のような張り出しや高欄表現の有無、それに関連して軸部を受け口の形状、軸部上面の孔が方形か円形か、隅降棟への稚児棟・脇棟の付加の有無、といった項目が設定できる。これらは型式設定の主要項目ではないが、型式変化の指標となる可能性がある。猿投窯産瓦塔や東海地域の瓦塔について、軸部の諸属性を確認すると表1となる。屋蓋部分類にしたがって猿投窯産瓦塔を検討してみよう。

Aタイプ屋蓋部は、黒笹36号窯跡(鳴海32号窯期～折戸10号窯期古段階)、黒笹35号窯跡(折戸10号窯期新段階～井ヶ谷78号窯期)で出土している**。継続して生産されており、猿投窯型の一連列としてあつかうべきであろう。折戸23号窯跡の初軸では持ち送りのみで粘土帯不使用であるが、黒笹31号窯跡ではヘラ削り成形した棒状の粘土帯(空中粘土帯か)が確

* 石田成年によって前者はAタイプで後者がBタイプと呼称されている。本稿の型式名もこれに対応させている。

** 三好町歴史民俗資料館で確認。報告書未刊行。屋蓋部はA・B両タイプあり、Bタイプのものは黒笹34号窯跡瓦塔に似る。軸部片では空中粘土帯の小片があるがBタイプ屋蓋部に伴うものか。他にわずかな庇状粘土帯とヘラ切り成形による持ち送りが付いた軸部片がある。窯の年代観は嘉見氏による。

認できる。ただいずれの資料でも凸形スタンプは使用されていない。観察資料を見る限り、組物表現は比較的シンプルに作る傾向があり、猿投窯ではAタイプ屋蓋部の瓦塔を制作するにあたって独特の指向性がはたらいたものと考えられる。これを猿投窯型A類とする。

Bタイプ屋蓋部は東海地域で広く分布する。このうち平瓦一枚ずつを表現するのは音楽寺跡と鳴海286号窯跡の瓦塔である。前者は丸瓦列にも節が入るのだが、特徴的なのは屋蓋部とその上に位置する軸部を一体で成形している点である***。後者は高欄表現にも注目したい。この高欄表現は猿投窯産瓦塔で唯一の存在であるが、京都府瀬後谷窯跡の瓦塔が瓦列表現とともに高欄表現を有している点で共通する。垂木表現や屋蓋部全体に反りがあるなど瓜二つとはいえないが、近畿地域との直接的な系譜関係を想定できるタイプである。そこで鳴海286号窯跡の瓦塔をもって猿投窯型C類とする。

表1によると、猿投窯産瓦塔のなかではBタイプ屋蓋部で粘土帯技法の多用がみられる。粘土帯技法の組み合わせでは、空中粘土帯のみのタイプと、空中粘土帯と壁付き粘土帯がセットになるタイプがある。前者が猿投窯産瓦塔、後者が東三河・遠江の瓦塔で主体的であることは先に示したが****、西三河地域である豊田市水入遺跡出土瓦塔の軸部でも壁付き粘土帯が確認でき、今後、後者のタイプが猿投窯で確認される可能性もある。したがって前者を猿投窯型B1類、後者を同B2類としておこう。これらは凸形スタンプを多用することで猿投窯型A類との違いが強調されるのだが、需要者(瓦塔の発注者)の違いからくる何らかの意図的な作り分けがあった可能性も考えたい。

*** このように屋蓋部と軸部を一体で成形する瓦塔は美濃須衛窯産瓦塔の一部にもみられる特徴である(稲田山13号窯跡)。またこの瓦塔とは瓦列の表現だけみると近似している。ただ細部表現は明らかに美濃須衛窯産瓦塔の方が単純で、軸部壁面にスリットが入る点も独特である。音楽寺跡東方の江南市小折遺跡ではこのような瓦塔が出土しており、地理的にみて美濃須衛窯産瓦塔が搬入された可能性が高い。このことから音楽寺跡の立地が美濃と尾張の結節点であることがわかる。あくまで想像だが音楽寺跡の瓦塔が猿投窯型と美濃須衛窯型両方の特徴を有している点からこれらの祖形のひとつであったとも考えられる。

**** 永井2006。ただしこの時点では「(広義の)猿投窯系」と「東三河・遠江系」として示した。

表1 瓦塔軸部における粘土帯の採用状況

地域	遺跡・瓦塔	軸部				
		持送り表現	空中粘土帯	壁付き粘土帯	庇状粘土帯	簾状粘土帯
猿投窯	折戸23号窯跡	○	×	×	×	×
猿投窯	黒笹8号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	折戸80号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹31号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹34号窯跡(1)	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹34号窯跡(2)	○	○	×	○	×
猿投窯	黒笹35号窯跡(1)	○	×	×	○	×
尾張・西三河	勝川遺跡	○	×	○	○	○
尾張・西三河	真福寺東谷遺跡	○	×	○	○	○
尾張・西三河	郷上遺跡	○	○	×	×	×
尾張・西三河	音楽寺跡	○	○	×	×	×
東三河・遠江	竹林寺廃寺跡	○	×	×	○	○
東三河・遠江	市道遺跡	○	○	○	×	×
東三河・遠江	見附端城遺跡	○	○	○	×	×
東三河・遠江	宇志遺跡	○	○	○	×	×

猿投窯型 B1 類では空中粘土帯が一段の場合と二段の場合がある。一段のものは折戸 80 号窯跡にあり、二段のものは黒笹 8 号窯跡や黒笹 34 号窯跡にある。前者から後者への変遷が考えられるが、それは「複雑化と混乱」のように見受けられる。黒笹 8 号窯跡瓦塔では凸形スタンプでなくヘラによるくり抜きで持ち送りも粘土帯も棒状粘土で作る。また黒笹 34 号窯跡(折戸 10 号窯期新段階～井ヶ谷 78 号窯期) 出土瓦塔では一見繊細な空中粘土帯であるが、凸形スタンプは天地を逆転して押されており、用法としては正しくない*。

猿投窯型 B2 類では宇志遺跡瓦塔が新しい時期であろう。当該事例では壁付き粘土帯のみに凸形スタンプが押され空中粘土帯のそれは省略されている。しかし壁付き粘土帯自体に段差をつけることで立体感を増し、屋蓋部の陰になって見えにくい空中粘土帯に代わって視線を受け役目を果たしているように感じられる。

簾状粘土帯技法は猿投窯産瓦塔で確認されて

* 三好町歴史民俗資料館で確認。整理作業中の資料を調査させていただいた。Bタイプ屋蓋部(丸瓦列に節ありと節なし)が出土。軸部も2種類あるとみられ、2段の空中粘土帯のタイプと庇状粘土帯と空中粘土帯の間に持ち送りが来るタイプがある。いずれの軸部でも凸形スタンプの逆転がみられ、後者は壁面に無造作に凸形スタンプが押される。窯の年代観は嘉見氏による。

いない。また簾状粘土帯と空中粘土帯がセットになる事例も東海地域を通じてみられない。愛知県内では、勝川遺跡や真福寺東谷遺跡出土の瓦塔で簾状粘土帯と壁付き粘土帯がセットになっている。これらの瓦塔の位置づけについては続編で検討したいが、猿投窯産に先行する段階とみている。

信濃中・南部地域の猿投窯型瓦塔

猿投窯型瓦塔の分布は、伊勢・尾張・三河・遠江の東海道諸国の類例については以前示したが(永井 2006)、本稿作成のため調査を行ったところ、信濃国中・南部地域(中信・南信)にも広がっていることが確認できた。

安曇野市明科廃寺跡は、筑摩郡の北部に位置する古代寺院跡である。伽藍配置は明らかではないが、発掘調査により倉庫群の一画とみられる掘立柱建物跡が確認された。創建は7世紀後半でその後8世紀代にも建物造営があったと考えられている。出土遺物中に数種類の瓦塔がある(瓦塔1～3)。

瓦塔1はBタイプ屋蓋部で空中粘土帯と凸形スタンプが認められる。硬い須恵質の仕上がりで、猿投窯型B類である。ただこの瓦塔の平面

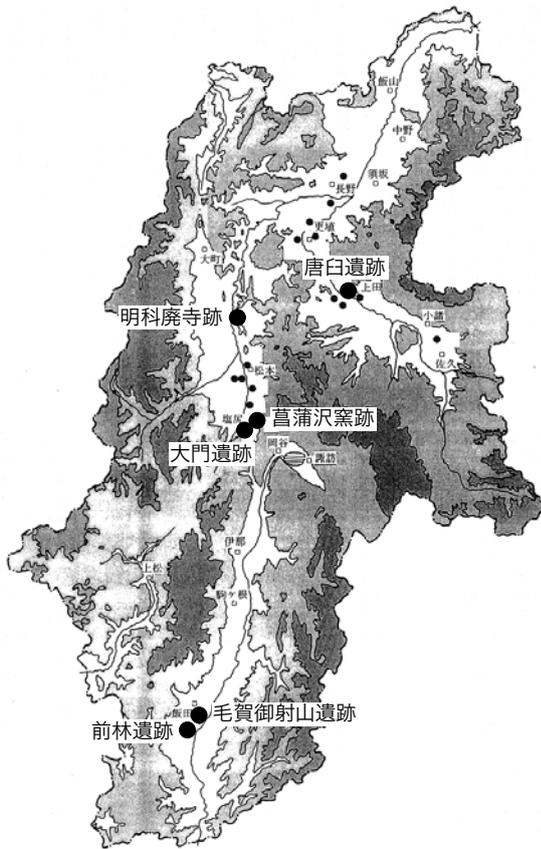


図3 長野県の瓦塔分布図(出河1995に加筆)

形状は、屋蓋部から八角形になることが確実で、巨大な宝珠を頂部にのせた形が考えられる。破片数から想定されるのは八角堂である*。

瓦塔2はAタイプ屋蓋部でそのうえ軸部が不明なのでにわかには猿投窯型A類と限定しがたいが、瓦塔1と焼成がよく似ており、セットになっていた可能性もある。そうすると猿投窯産の可能性も出てくるのだが、その判断については胎土分析も必要である。

瓦塔3は瓦塔2と同じAタイプ屋蓋部であるが、その規模はずっと小さい。焼成も土師質で関東甲信越地域に分布する9世紀代瓦塔の一類型である。軸部上端から斜め下方に張り出した庇状粘土帯を持ち送り表現の粘土が支える。当該遺跡が9世紀代も寺院の一画であったかは不明であるが、8世紀後半の瓦塔と同じような場所に再び瓦塔が造立された点に注目しておく

* 大澤哲氏の教示による。また屋蓋部・軸部・宝珠・基壇部と構成部位がそろっており、これ以上多数の破片がまとまって出土する可能性は低い。

たい。

飯田市前林遺跡では、8世紀代の集落が確認されている。明確な寺院遺構はないが軒丸瓦が出土した(飯田市教育委員会2005)。発掘調査以前に瓦塔と線刻仏画が採集されている(遮那1966・岡田2004)。瓦塔は2種ある(瓦塔4・5)。

瓦塔4は猿投窯型B2類である。屋蓋部は猿投窯産瓦塔と全く違和感がない。軸部は摩耗が進んでいるのではっきりしないものの、壁付き粘土帯に大きな凸形スタンプによる組物表現があるもの(13)と、庇状粘土帯を伴い壁面に直接凸形スタンプを押した軸部片(14)がある。色調は灰白～黄褐色で焼成は軟質である。

瓦塔5は猿投窯型A類である。17は屋蓋部片であるが、丸瓦列を型で成形した後に隅降棟を貼付ける。色調は灰～青灰色、焼成は硬く須恵質である。これと似た焼成の破片で抽出すると16～20が該当する。20は軸部本体で開口部があることから初軸とわかる。18と19は持ち送り表現であるが、粘土板というより粘土棒をへう削り加工したやや太めのものである。なお繊細な筆致の線刻仏画(図6)は、色調や焼成が瓦塔5と同じで、初軸に安置されていたものと推測される。

瓦塔4と5の先後関係は明らかではないが、8世紀後半を中心とした時期である。当該遺跡は、同時に交替か不明ながら2基の瓦塔が造立される場所であったことに注意しておきたい。瓦塔の生産地については胎土分析が必要だが、優美な線刻仏画を伴うとみられる瓦塔5は猿投窯産の可能性が高い。

飯田市毛賀御射山遺跡も明確な寺院遺構はないが、西三河地域(岡崎市北野廃寺跡)に文様系譜のある軒丸瓦や丸・平瓦が出土している。瓦塔(瓦塔6)は屋蓋部がないものの凸形スタンプのある空中粘土帯から猿投窯B2型と判ぜられる。22では空中粘土帯が、23では壁付き粘土帯がそれぞれ確認できる。これらは上層にくる軸部である。24は天地が不明だが扉軸穴もあり初軸片の可能性を考えるが、それを囲う扉や柵の部位かもしれない。色調は明灰～灰褐色で焼成は硬く須恵質である。瓦塔が出土した竪穴建物跡からは8世紀後葉の須恵器や土師器が出土する。

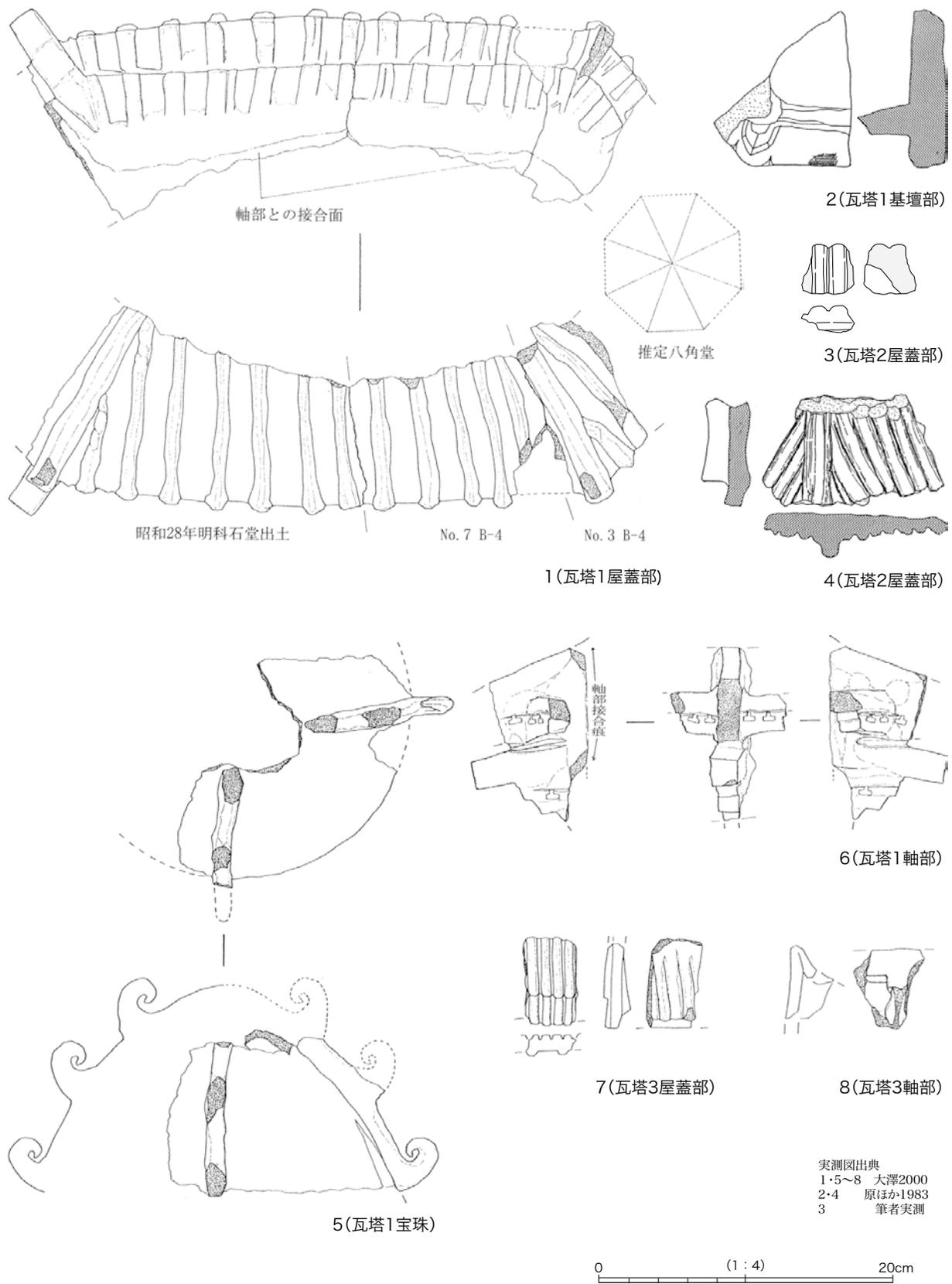


図4 明科廃寺跡出土瓦塔実測図

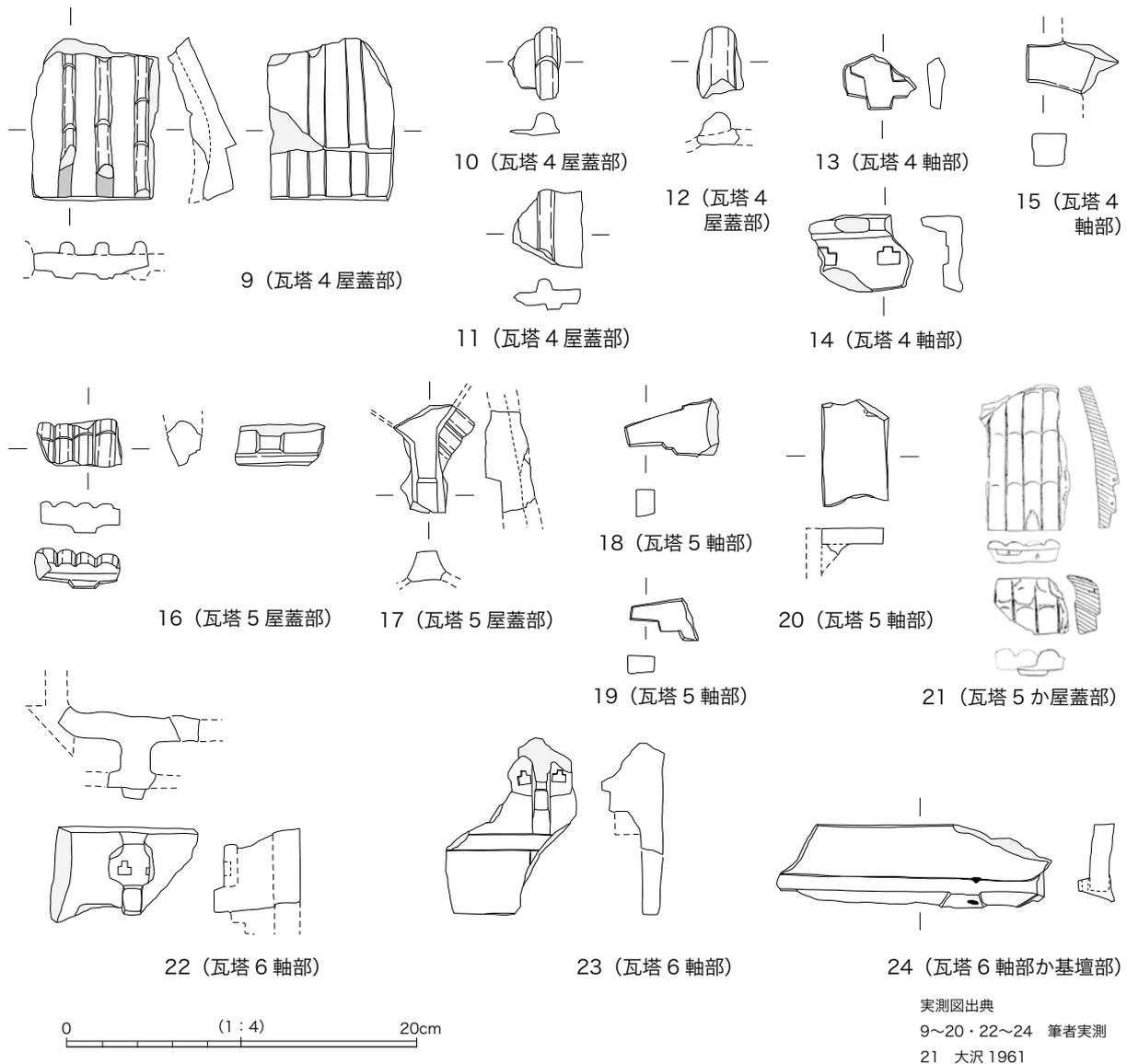


図5 飯田市内出土瓦塔実測図 (9~21 前林遺跡、22~24 毛賀御射山遺跡)

信濃国域の瓦塔について、これまでの集成(林1985・出河1995)と今回の調査結果を合わせて概観してみよう。

中・南信地域では8世紀後半～9世紀初頭段階に猿投窯型を含む瓦塔が存在する。菖蒲沢窯跡出土瓦塔(中信、塩尻市)はBタイプ屋蓋部であるが、猿投窯型やその系統ではない。折り曲げた棒状粘土の突出のみで組物表現を行う点は美濃須衛窯産瓦塔に近い。このことは同窯が美濃須衛窯からの技術系譜下にあるという見解に近い(鳥羽編1991)。大門遺跡出土瓦塔(同市)

も菖蒲沢窯跡の瓦塔と同じタイプである*。南信地域の瓦塔造立は東海地域と同じく8世紀後半に一つのピークがあったと考えられるが、その入手経路は須恵器(と生産技術)と同じく複数あったようである。

一方東・北信地域の瓦塔造立は8世紀代よりも9世紀代に最盛期があるようで、関東地域と似た展開である。瓦塔の系譜も中・南信地域の瓦塔が在地で発展し広まったものではなく、関

* 大門遺跡出土瓦塔は未実見であるが、屋蓋部は菖蒲沢窯跡瓦塔と同じである。一志ほか1959の図版では壁付き粘土帯のような斗栱がみえる。



図6 前林遺跡出土の線刻仏画(岡田2004より)

東地域からの伝播であろう。上田市唐臼遺跡の瓦塔は大仏類型とされ(池田1999a)、東信地域では8世紀後半に関東地域経由で瓦塔造立が始まったことを示している。

9世紀代の中信地域では、それまでの瓦塔と入れ替わって関東地域にルーツのある瓦塔が展開する。ただそれも松本平の集落が主体である。こういった集落遺跡からは「寺」墨書土器が出土するなど関東地域の当該期集落と似た様相がうかがえる。

南信地域では9世紀代の新たな瓦塔造立はなく、東海地域と同様である。それは集落が減るからではない。飯田市域の分析では、9世紀前葉～中葉段階では7世紀代からの集落に加えて「開発型集落」が増加し、9世紀中頃から衰退が始まるという(小平2003)。中信地域あるいは関東地域と同じく、台地上の開墾を進める集落の消長がみられるのだが、こと瓦塔に関しては違っている。それは開発行為を含む集落のあり方と瓦塔が必ずしもセットではなかったことを示している。集落からは浮遊した何らかの信仰圏としての瓦塔の展開を考えてみる必要があるだろう。

むすびにかえて

本稿では猿投窯型瓦塔を設定し、その周辺地域への展開の具体相を信濃国中・南部地域にみた。「地域型」瓦塔をもとに分析を進めると、今まで漠然ととらえられてきた瓦塔に関する認識があらたまるのを実感する。今後は猿投窯型瓦塔に先行する時期の瓦塔について検討を進めたい。

本稿作成にあたり調査の便宜をはかっていただくとともに種々ご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

大澤哲 土屋和章 羽生俊郎 岡田正彦
 嘉見俊宏
 安曇野市教育委員会
 飯田市教育委員会
 三好町歴史民俗資料館

参考文献

- 飯田市教育委員会 1978 『毛賀御射山遺跡』
- 飯田市教育委員会 2005 『前林遺跡』
- 池田敏宏 1999a 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要』7 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 1999b 「東国の瓦塔出土遺跡」『第13回企画展 仏堂のある風景—古代のムラと仏教信仰—』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 池田敏宏 2000 「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東』考古学資料から古代を考える会事務局
- 石井清司 1992 「3. 木津地区所在遺跡（1）瀬後谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第51冊
- 石田成年 1997 「榎河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』
- 一志茂樹・小松 虔 1959 「塩尻市下大門の瓦塔遺跡」『信濃』11-8 信濃史学会
- 大沢和夫 1961 「前林発見の瓦塔について」『伊那』昭和36年7月号 伊那史学会
- 大澤 哲編 2000 『明科廃寺址』明科町教育委員会
- 岡田正彦 2004 「考古学からみた飯伊地方の古代仏教文化」『飯田市美術博物館研究紀要』14
- 小田富士男・下原幸裕 2007 『豊前・トギバ窯跡の調査』福岡大学考古学研究室
- 尾野善裕ほか 1996 『県営北部畑地総合土地改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』三好町教育委員会
- 亀田修一 2002 「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学』下巻 古代吉備研究会
- 草原孝典編 2004 『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- 小平和夫 2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』55-2 信濃史学会
- 斉藤嘉彦 1989 「真福寺東谷遺跡」『新編岡崎市史』14 史料編考古（下）
- 遮那真周 1966 「飯田市桐林字宮洞発見の埴仏」『伊那』昭和41年3月号
- 善端 直 1994 「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』奈良大学
- 高井梯三郎ほか 1982 『播磨千本屋廃寺跡』宍粟郡山崎町教育委員会
- 高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-3 日本考古学会
- 出河裕典 1995 「信濃の瓦塔再考 —近年の出土例を中心に—」『信濃』47-4 信濃史学会
- 東京国立博物館 2002 『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書 瓦塔・鷗尾』
- 鳥羽嘉彦編 1991 『菖蒲沢窯跡』塩尻市教育委員会
- 永井邦仁 2005 「東海地方の古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』15 三河考古刊行会
- 永井邦仁編 2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 永井邦仁 2006 「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』7 愛知県埋蔵文化財センター
- 費 元洋 1996 『市道遺跡II』豊橋市教育委員会
- 林 和男 1985 「信濃の瓦塔」『信濃』37-4 信濃史学会
- 原 嘉藤・三好博喜 1983 「明科廃寺跡」『長野県史考古資料編全一巻（三）主要遺跡（中信）』長野県